

平成30年11月27日

あきる野市議会議長 殿

会 派 名 自由民主党志清会

代表者氏名 堀 江 武 史



会派の（調査研究）報告書

このことについて、下記のとおり実施したので報告します。

記

1 調査研究または 研修実施日	平成30年 11月 14 日（水）～ 平成30年 11月 15 日（木） 1泊 2日
2 調査研究または 研修の場所	栃木県宇都宮市 会場：宇都宮市文化会館
3 調査研究事項 または研修名	第13回全国市議会議長会研究フォーラム
4 参加者氏名 （ 8 名）	堀江武史 天野正昭 中嶋博幸 村野栄一 窪島成一 ひはら省吾 中村一広 臼井建
5 調査研究または 研修の概要及び 感想等	別紙のとおり

※ 自家用車を使用した場合は、必ず自家用車使用報告書を添付してください



第1日目 11月14日 13:00-17:00

第一部 基調講演

「地域共生社会」をどうつくるか ～2040年を越える自治体のかたち～

宮本太郎氏（中央大学法学部教授）



<講演内容>

(1) 日本の各地で進む 2040 年問題

全国の自治体が2040年問題に、どのように向き合うのか問われている。

「支える現役世代」と「支えられる高齢世代」という従来の考え方では、65歳以上の生活保護受給者が200万超となる2040年には、実質的には「肩車社会」ではなく、「重量挙げ社会」となる。

一方、地方の若年層は東京へ流入し、地方はさらに高齢化が進む。東京は人口規模は維持するが出生率が低いため高齢化が進展するという状況になるため、地方と東京がそれぞれ違うかたちで、持続可能性を問われるようになる。

(2) ピンチをチャンスと捉える。

- ① 生活困難をかかえた人々が増え、非正規雇用が拡大している状況下で、福祉の目的を「働けない人を保護すること」から「困難を抱えた人を元気にすること」、いわゆる、元気人口を増やすことへ政策を転換すべき。そのためには、縦割り

制度を越えた包括支援により、活躍する場を創出することが必要。

- ② 定年後の男性は、地域へのデビューが消極的な場面が見受けられる。高齢者の知識、経験、能力を地域の財産としてとらえ、定年後男性の地域デビューを支援することが重要。
- ③ 地縁、血縁などが薄れていく現在、子育てや介護などをきっかけとした新しい縁が生まれている。鹿児島市のナガヤタワー、京都市の住い生活支援事業などは、その新しい縁を踏まえての新しいまちづくりの展開例ともいえる。(別添資料集 16 頁～17 頁)

(3) まとめ

2040 年問題を迎えピンチをチャンスと捉え、住民の幸福のための施策を展開するためには、政治の役割が大きい。部局の縦割りを越えた包括支援の場づくり、高齢者がずっと出番のあるまちを目指しての地域デビュー支援、居住支援協議会を設置したケアと居住をつなぐ地縁づくりなど事例は多々あるので、各地方議会において、参考とされたい。

<考察>

- ・高齢化が進む当市において、長寿を楽しむことができるようなまちづくりは課題である。そのための具体的事例をいくつか紹介いただいたことは成果であった。
- ・宮本教授の講演の中で、「これからの地域づくりの新しい目標は地域共生社会の実現」とお話があった。地域共生社会とは、縦割りや支え手・受け手という関係を超えて地域住民や多様な主体が、自ら主体的に地域づくりを行っていく、まさに地方主権ともいえる。その基本スタンスは賛同するところである。
- ・上記(2)①の具体例(誰でも人財への包括支援例)として、三重県名張市の「自立相談支援事業」や千葉県社会福祉法人生活クラブ風の村事業本部による「ユニバーサル就労」などが紹介された。

名張市では、市内15か所に「まちの保健室」を設置し、誰でも行きやすく課題が解消しやすい効果があるとのことでした。

風の村によるユニバーサル就労は、誰でも働きやすい場づくりを目指し、コーディネーターのような存在である「コミュニーター」が、一人ひとりに合わせて業務の分解、切り出しを行うことにより、一般賃金職員と最低賃金職員とに振り分け、就労の効率化を図っている。

まちの保健室のように小学校区で教育医療福祉について相談できる体制というのは、住民にとって相談しやすくありがたいものだと思う。とりわけ、課題が解消しやすいということは住民に大きなメリットである。

また、ユニバーサル就労は、高齢者だけでなく障がい者にとっても有用である。

いずれの事例とも、体制づくりに大きなコストなども想定されるため、仕組みなどを十分に研究すべきである。

・上記（２）②としては、年金兼業型就業の展開により、定年後の男性がずっと出番のある状況へ広がっていく可能性があるとのことだったが、実践例が紹介されなかったのは残念だった。

ただ、考え方として、グランドシッター、農福連携、自伐型林業、技能取得などの就業と年金の両輪で生活していく高齢者をバックアップしていくことは、高齢化が進む中、福祉基盤や森林や農地を多く抱える当市においては、検討に値すると思われる。

・上記（２）③の例として、鹿児島市のナガヤタワー、京都市すまい生活支援事業、シェア金沢については、時間の関係上、詳細には触れられなかった。

ナガヤタワーは、新しい家族を目指す現代の長屋として注目に値するのではないか。高齢者の終の棲家でもあり、里親の下で暮らす子どもたちの住居、発達障害の子どもたちのデイサービス施設などで高齢との交流も期待されるだろう。

また、空家が増大するなかで、京都市のケアと居住をつなげる仕組みづくりは参考になる。さらに、居住支援協議会が福祉主体と不動産主体の連携の役割を担い、高齢者単独世帯や障がい者世帯、ひとり親世帯のケアや見守り、住居確保などにつなげている。入居債務保証や遺品整理などの課題はあるようだが、検討に値する。

・日本人の半数が 107 歳まで生きる時代に突入する。60 歳、65 歳で定年というのはまさに、定年後をどう生きるか、どのように地域の人財として活躍していただくかという

ことを考えなくてはならない。あきる野市が長寿を楽しめるまちに発展できるよう、努力していきたい。

第二部 パネルディスカッション

「議会と住民の関係について」

コーディネーター 江藤俊昭（山梨学院大学大学院研究科長）

パネリスト 今井照、本田節、神田誠司、小林紀夫



＜パネリストの意見＞

（今井氏）

・「市」の政治環境として、行政への期待は大きいものの、議員・議会への期待は低い。一方、町村より身近ではなく、国のような大きなテーマを扱うのでもないため、市の政治は比較的に遠いものになっている。

・自治体政治が見えづらくなっている中で、自治体政治の総量を上げる必要がある。総量とは、議員数×時間である。時間とは、権力が議会にあることを示すこと。例えば、首長との争点形成に勝つこと、都や国との争点形成に勝つこと、市民の支持獲得競争に勝つことである。争うことの楽しさを伝えれば、市議会の魅力が市民に伝わり、議員になろうとする人も増えてくるのではないだろうか。

・市民活動サイドから議会側への問いかけが行われているケースがあった。議会には自らの権限を放棄することなく取り組んでほしい。

(本田氏)

・主権者教育を進め、若者に魅力的なまちづくりをすることが議員のミッションである。
・議員は何をやっているんだろうと、住民は思っている。住民の中に自ら入って、意見を聞くべき。また、議員は地域リーダーでもあるので、地域の中で横串や縦串を刺す役割を担ってほしい。

(神田氏)

・地方議会議員は一昔前は期待していなかった。今は、社会のために尽くそうという使命感をもっている議員の活躍に期待する。今後は都市内での分権が進んでいく。そうになると、行政主導でなく市民の立場が重要となる。そのような視点を持っていただきたい。
・目に見える成果を示してアピールするには、議会だよりの充実が近道である。

(小林氏)

・議会と住民を近づけるためにも、選挙のあり方を変えるべきである。そのために、公職選挙法の改正が必要。
・議長の任期延長、副市長に議員を登用、特別公務委員に議員経験者を充てるなどの議会改革の取組を進めたい。

<考察>

パネラーが思い思いの発言をしていたが、基本的には、「議員のなり手不足状況は問題であり、魅力的な議会づくりを検討すべきである」「地域ごとの課題を探り改善につなげる議会の役割は大きい。議員への潜在的期待は大きい。」ということである。

私たち志清会は、責任会派としてあきる野市民の期待は大きいと感じている。パネルディスカッションのご意見を踏まえ、今後もあきる野市議会を市民にとって魅力あるものにすべく、政策提案や広報活動の充実を図っていきたい。

第2日目 11月15日 9:30-12:00

課題討議

「議会と住民の関係について」

コーディネーター 江藤俊昭（山梨学院大学大学院研究科長）

パネリスト 桑田鉄男、伊藤健太郎、ビアンキアンソニー、道法知江



＜パネリストの意見＞

（桑田氏）

・久慈市議会の議会改革の取組

- ① 前文方言の議会じえじえじえ基本条例→議会基本条例のこと
- ② 住民と議会が協働する場「かだって会議」

議会報告会の失敗を踏まえ、逆転の発想で制度設計した。

参加者が集まらない→無関心、警戒心

参加者の偏り→学生、働き盛り、子を持つ親世代

特定の人だけが発言→サイレントマジョリティ・マイノリティ

不満や陳情に終始する→未来を話そう

そこで、議会に警戒心を持っていたり、無関心な層、特に働き盛り、子どもを持つ親世代の市民に、声なき声を語ってもらい、未来に向かってどんなまちにしたいのか、そのための課題は何なのか、一緒に話し合う場、とした。さらに、全議員が「かだって会議」に参加しており、会議での対話スキルを磨くために議員自身もファシリテーション研修を受講している。

<考察>

当市議会では議会報告会をやり始めたところであり、どのような形にすべきか模索中である。久慈市議会では反省点をしっかり改善へと昇華している。議会が報告するというよりは、意見を交わす、協働の場としていることは、今後の私たちの議会報告会に大いに参考となる。

(伊藤氏)

・市議会の主権者教育推進プロジェクト

新潟市議会では市内の中高校生への主権者教育を推進するため、議会全体で取り組んでいる。まず、議員研修会において市議会としての対応をしっかり学び、そのうえで実行委員会を開催し、プロジェクトチームで具体的な内容を検討していった。模擬市議会の実施などを年間延べ4校、延べ参加生徒数553名となっている。これにより、市議会への関心が19%から92%へと高まるなど成果が表れている。

<考察>

中高生への主権者教育については、大きな意義があると思われる。実施については、議会改革の中で検討していきたい。

(ビアンキ氏)

・市民参加と議会権能向上

犬山市議会では、一般質問や議案審議の後に全員協議会を開催し、そこで議員間討議を実施している。答弁が納得できない一般質問を取り上げ、議員間討議で意見を集約し、提案へとつなげる効果があった。また、市民参加の機会を増やしている。

市民フリースピーチは、市民が議場で議員に対し、市政全般に対し5分間自由に発言ができるものである。市民からの意見は、全員協議会で議員間討議を行い、申し入れなどのアクションをとることになる。また、その協議結果はホームページなどで公開している。

そのほかに、女性議会や親子議場見学会なども実施している。

<考察>

ビアンキ議長という外国人目線での議会改革は鮮烈であった。市民フリースピーチなど、議会活性化のために興味深い取り組みもあり、今後の議会改革に参考になった。あきる野市も土着の住民はもちろんだが、市政を発展させるためには、多様な意見、とりわけ、外からの視点を的確に生かしていくことが重要であると考えさせられた。

(道法氏)

同氏は働く女性たちの気持ちをしっかりとらえ、政治にとびこんだ。信念と誠実さで議長として活躍している。生活者の生の声を広く受け止め、政策へ生かすことが大事であることを改めて認識させていただいた。

<考察>

多様化する現代社会には、女性特有の課題があり、女性の視点での政策提言も大事である。そのため、議会の中には、政策にしっかりコミットできる女性議員の存在が必要とも思われる。



